

令和四年度卒業研究発表会要旨の巻頭にあたって

磯貝 龍邑（筑波大学 生物学類 4年）

遂にこの要旨集を読む立場ではなく、書く立場になってしまいました。いざこの立場になって筆を持つと実感が沸々と込み上げてきます。早速卒業研究発表会の紹介に移りたいところですが、まずは今年の卒業研究生について大学生活をもとに振り返ってみたいと思います。

時間が過ぎるのは年々早くなっていくと言われる通りに、確かに気がついたら大学卒業間際となりました。しかし、思い返せば大学生活というものは一瞬と言い切ってしまうには濃密であったようにも思えます。少し前まで高校生であった私達を最初に迎えたのは基礎生物学実験でした。毎週1回3時限連続に及ぶ実験と不慣れな実験レポート作成は大学生になったことを実感させてくれました。人によっては初めての一人暮らしやサークル活動、アルバイトといった様々なことに日々身を揉まれながら、専門基礎科目、専門科目、実験・実習といったカリキュラムを修めてきました。課題や試験には苦い思い出もあるかもしれませんが、やはり専門的に学ぶ楽しさや喜びを多くの人は感じたのではないのでしょうか。

そして私達の大学生活といえば、あの事項にどうしても触れなければなりません。新型コロナウイルス感染症とそのパンデミックについてです。どの学生にとっても大学が全面閉鎖したことは衝撃的で、実験・実習や課外活動の多くは対面での行動が必須なことから、大学・学生にとって未曾有の危機となりました。そのような中でも以前と同じような体験が出来るようにとオンライン技術等を駆使して大学・学生の双方から対処してきました。

けれど、今やその「以前」を知るのは学生の中ですと私達の代のみとなりました。昨今の情勢は、もはや以前にどう戻すのかではなく、これからどうするかに方向性がシフトしたようにすら感じます。問題が発生し、対策を行い、考えが変わっていく。こうした変化がたった数年で実際に起こったという事実には、私は遺伝型どころか表現型の枠組みすらも超えそうな人間の適応力の高さを実感しました。

さて、前置きが長くなりましたが、今年の卒業研究生はこうした時代の変化や人間の適応力を目の当たりにしながら学んできた世代です。全員の卒業研究をまとめて言葉にするのは難しいので多くは語れませんが、先のような大学生活を過ごしてきた人達が約1年という時間を費やして研究してきた成果が次ページ以降にあります。卒業研究発表会を聴いてくださる皆様におかれましては、ひとつひとつの要旨に目を通していただくと幸いです。

また、1~3年生の皆さんにとっても、発表会は大切なものとなっています。1, 2年生においては生物学類でどのような研究が出来るのかを知る重要な機会であり、3年生においては自身の所属する研究室や関連分野でどのような卒業研究がなされているのかを再度確認する機会となるからです。だからこそ、ぜひこの要旨集を発表会当日までの間で閲覧し、発表会でどの研究発表を見ようかと事前に計画を立ててみてください。そうした過程が、皆さんの興味や関心をより深める手伝いをしてくれるはずですよ。

今年の発表会は3年ぶりに対面開催の予定です。昨年度、一昨年度のオンライン開催も素晴らしい発表会でしたが、やはり対面で行うからこそその良さというものもあります。会場の緊張感、その場での質疑応答、複数会場における賑わいといった対面開催ならではの良さを感じていただければ何よりです。

最後になりますが、研究をご指導していただいた先生方や支えてくださった研究室の先輩方、発表会の運営をしてくださる後輩の皆さんや関係する職員の方々のご協力があったからこそ、私達は卒業研究発表を行うことが出来ます。この場をお借りして、皆様に深く感謝申し上げます。

Communicated by Kensuke Yahata, Received January 23, 2023